生家へ

色川武大

双葉社

生家

色川武大

图书馆藏章

双葉社

著者略歴

色川武大（いろがわぶだい）

昭和４年（1929）、東京に生まれる。東京市立第三中学校を中退して、その後、博打三昧の生活に入る。昭和36年、色川武大名で書いた「黒い布」で中央公論新人賞を受賞。昭和52年、「怪しい来客簿」で泉鏡花賞、昭和53年、「離婚」で直木賞、昭和57年、「百」で川端康成文学賞を受賞。阿佐田哲也名で、「麻雀放浪記」「麻雀五十番勝負」などがあり、井上志摩夫は昭和30年～昭和36年まで使っていた筆名。

生家へ

著　者　**色川武大**

発行者　井上功夫

発行所　株式会社　双葉社

東京都新宿区東五軒町三―二八　〒一六二―

電話（〇三）五二六一―四八一八（営業）

（〇三）五二六一―四八三三（編集）

振替　〇〇一八〇―六―一一七二九九

印　刷　慶昌堂印刷株式会社

製　本　株式会社川島製本所

落丁・乱丁の場合は本社にてお取り替えいたします。

定価・発行日はカバーに表示してあります。

©色川武大　1997年　**Printed in Japan**

ISBN4-575-23314-5 C0093

目次

作品1 7
作品2 21
作品3 35
作品4 51
作品5 69
作品6 89

作品7 107
作品8 125
作品9 147
作品10 167
作品11 189
黒い布 211

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

装幀＝藤井美樹

生家へ

作品1

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

夜半、ふと眼をあけると、視界全体が、いつのまにか生家の八畳間になっている。

それは幻というやつであって、今、自分が、どこに寝ていてどういう状態か、むろんよく承知をしている。けれども、頭がはっきりしているから、幻の方が色あせて消えていくということにはならない。多分、三分か五分ほどの間であろう。その間、古い映画のフィルムのようにチカチカとそれはまばたきし、しかし頼りなげではなく、むしろ圧迫さえするように視界をおおっている。眼を開いていてもつぶってみても同じことで、自然に消えていくまで、静かな発作に身をまかせるようにして、つくねんとそれを眺めているより仕方がない。

幻は頻々として来襲してくる。灯を消すと毎夜のこともある。ぽっつりとひと月くらい間があくときもある。そうしてある日またそれが当然のようになんの前ぶれもなく現われてくる。その理由は私にはわからない。多分、身体の中の何かの状態がその因になっていよう。そうとしかいいようがない。

生家に戻りたい、生家に戻って、時が流れるままにうすぼんやりとすごしたい、今かかわりあっている日常を、何もかも遠くへほうり投げて、生家へ戻ってしまいたい、――そういうふうなことを日常の折り折りに私も考える。私は、比較的、そういうことを考えがちな男である。けれ

ども、そのことで心労するほどではない。

生家がもはや無いのならば、或いは、あっても遠国で、おいそれと帰るわけにいかないのならば、執着がそこにいってなんの不思議なところもない。けれども私の場合は、東京の生まれ育ちであり、タクシーに乗れば二十分たらずのところに、幼い頃とほとんど変らぬ恰好で生家がまだ建っており、親兄弟が住んでいる。私は自分の都合でべつの所に仮りの巣をかまえているにすぎず、生家に住みつこうと思えば、受入れ態勢はあるのである。それどころか、折り折り生家に顔出しはするが、けっしてそのことに熱心ではなく、むしろ、自分の日常の烈しいすぎゆきに心を奪われているのである。

生家ということでなく、微妙な差であるが、肉親ということになると、この方にははっきりとした執着がある。親たちは老いて、父親は九十二、母親も七十を越えており、諸事、案じずにはいられない。そればかりでなく、弟は転勤、母親はべつの場所で商いに生甲斐をみつけ、かんじんの私は出奔が多く、父親をひどい孤絶の状態においてしまったことがあった。私は、肉親に関しては、いつも自分勝手で、幼い頃から精一杯反抗し、同時に、特に父親に対しては身体が甘酸っぱくなるほど執着し、外形はともかく、気分のうえではずっともつれあって生きてきた。

だから、肉親の幻を見るというなら、ことりと納得する。現に、父親に関しては、たびたび幻を見る。

けれども、生家の幻には、人の姿を見たことがない。肉親に密着するときの情念のようなものがまったく無いとさえいえる。だから私には対応のしようがない。幻が消え去ってから、そう

だ、あそこはなつかしいところなんだから、というような結着をわずかにひとりでつけるのである。

幻の八畳間には、仏壇があり、違い棚があり、小さな庭に面したガラス障子に秋草を模した切り紙が貼ってある。天井がかなりくろずんでおり、天井板のすきまに貼った紙に雨もりの痕がついている。そうしてかすかに黴の臭いさえ意識される。

長押の額には剣戟ごっこで刀を突っこんだ穴があり、祖父の首だけのデスマスクが、床の間の小さな台の上に静止している。しめってひんやりとした畳の感触。縁側の端にしか当らない陽ざしに浮かぶ埃。私は、幼い頃の八畳間を隅から隅まではっきり記憶しているわけではないが、しかし、その隅から隅までを含めて、あの八畳間に寸分かわりないように思われる。

けれども、ただひとつちがうのは、誰も人の姿がない。

幻はなんの表情もなく、粛々として音もない。八畳間だけとは限らない。時として、長火鉢や大きな柱時計のある茶の間であったり、幼い頃弟と寝起きした六畳であったりする。

生家には子供部屋はあったが、母親の部屋というものがなかった。子供部屋の勉強机の横に鏡台があり、その隣りの、電燈のない暗い長四畳の箪笥の前で母親は着がえをした。そこに小さな屏風がおいてあった。その屏風には一枚絵の美人画が貼ってある。日暮れどき、海辺の岩かげで一人洗濯をする女。うらさびしく自分の来し方をかみしめているような絵であるが、幼い頃私は絶えずこの絵を意識し、無常のようなものを感じていた。私はその海辺のはずれに、海水浴場があるのだと思っていた。海らしい海は海水浴でしか見たことがなかったから。空の色はうすい

朱、というより黄色に近く、日没後の感じで、遠くの海水浴場の喧騒もおさまり、岸辺の波の弱い音だけがきこえてくるようであった。

幼い私は、その弱い波の音と、衰えかけた浅い朱の色にとりまかれて眠った。私は父親の四十なかばの初子で、そのせいか極端にひっこみ思案であり、幼稚園でも小学校でも、一人で級友の中に立っていられないような子であった。学校で、大勢の中で、自分一個の立場を守り、他との平衡を維持し、おくれぬように競いあう、そういうことを考えるだけで息がつまりそうになる。

登校の道で、まっすぐ歩いていってしまうと学校に行きついてしまうことがわかっているから、どこかで曲がってしまいたい。しかし、そういうことをしてはいけないんだという気持のほかに、朝の道というものは、三々五々、子供たちが皆同じ方向に歩いているような具合で、その濃い連帯のようなものを一歩はずれるということがなかなか力がいる。一方、だんだん学校に近づくから、行きついては困るという気持ちの方ものっぴきがならなくなるわけで、次の横丁で曲がろうとして果たさず、今度こそと気を張り、とうとう曲がっちゃったときの、空中をダイビングする虫になったような気持のよさ。そして一歩曲がってしまえば、たちまち脱落感。歩を進めるたびに、今頃、朝礼がはじまっているだろう、教室で教師が出欠をとっているだろう、今から駈けつけてまだおそくはないが、こうして逡巡しているうちにとりかえしがつかなくなっていくのが何にも代えがたく大事で、身体が小さく干し固まっていくような気分になる。

私はトボトボくよくよと、電車通りをどこまでも歩いていき、果ては上野公園とか、青山の墓地とかにたどりつく。そうして、とにもかくにも、先に行って破局はあるにせよ、その前に、家

へ帰るまでのたっぷり七八時間ぐらいは、余人を交えない平安なときを楽しめるのだと思おうとする。

公園では、人の眼に触れないような植込みの奥へ奥へと入って、草叢の中にしゃがんでいる。見えるのは頭上の空だけであり、その果ての方で街の騒音が高鳴っている感じだった。いくらか高学年になってから、その騒音の方に行ってみたくなり、さらに歩いて下町の興行街や相撲場や野球場でときをすごした。そこでは学校とちがって無責任でいられたが、そのかわりいつも孤独な見物人だった。

私はそういう場所で子供料金を払っていたから、したがって、小遣銭を、家に帰ってから盗み集めねばならなかった。

電車やバスにも乗らなかったし、買い喰いもしなかった。街のあちこちで、大勢の人の生き方をただ眺めているだけだった。それでも、或いはそれだからこそ、子供の私には不相応の小遣銭がなければ日が保たなかった。私は母親の財布を狙い、父親の財布を狙った。父親には再々にわたって馬鞭で殴られた。けれども私も必死だった。父親はそのあげく、財布の置場所を転々とするようになった。そうして私は、それをすぐにみつけた。家に帰ると一心不乱にそのことばかり考えた。母親は財布を、寝るとき以外は身から離さぬようになり、狙うとすれば、朝起きだして顔を洗う、その一瞬の間にやるしかなくなった。私はそのことにも練達した。

父親は、財布を枕の下にはさみ、起床と同時に身につけた。私は、夜、安眠などする気はなかったから、親たちが鼾をかきはじめるのを待って、這って、子供部屋を出、枕もとに忍び寄っ

た。そうして寝息をうかがいながら、枕の下に手をさしいれた。多分、父親は何度か気づいたときがあったろう。さすがに声を呑んだのであろう。

幼い私にも、そういう日常は、生き永らえるための生き方ではないことはわかっていた。小学校ではすでに私を見放して、一刻も早く卒業させてしまおうという按配であったようだが、私は、やがて大破局を迎えたときのことをもっぱら想像し、そこから先の自分など考えられない。

当時の小劇場のマイクロフォンはおおねむ粗悪で、小屋によっては、舞台の両脇にある拡声器から絶えずひゅうひゅうという雑音が流れている。雨の日などは、それが、表の風雨が烈しく吹きつのっているようにきこえた。雨の中でなくとも、私が客席に坐っている間に表の様子が急変して荒れ狂っているように思える。天災が生じ、交通杜絶にでもなれば、私が所定の場所に居ないことがばれるわけで、こうしてはいられない。ちょっと立って表の様子を見てきたいが、どうしてだか、席を立つことができない。

当時の興行街はたいがいいつも満員で、簡単には便所へも行かれないような具合でもあるのだが、そういうときというと私は思いきりがわるく、身体が馴染んだ場所から身を剝がすことができない。舞台の状景など眼に入らず、居てもたってもおられぬくせに、幕がおりるまで、瞳を固くし、かぐろい塊りになって坐っている。そうして下校の時間になるとはじめて席を立ち、表の世界の何事もない様子にほっと安堵しながら、今度は人を突き飛ばすほどの勢いで、一散に家まで走って帰る。下町から山手の生家まで、息を切らし、小休みもなく走った。朝とちがってのうのうと歩いてなどいられなかった。まるで、身体を痛めつけ、そこで苦しみさえすれば破局が遠

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com